

～・～交通遺児を忘れないで～・～

—無くなることのない交通事故—

モータリゼーションの発展は、目まぐるしく変化する時代の進歩に大きく貢献し、自動車の性能もここ十数年の間で大幅な進化を遂げてきました。自動ブレーキや自動運転システムなど、一昔前には夢のようだった性能が今や現実となり、私たちの「運転」に対する認識も大きく変化してきました。

今後もハイグレードな性能を追い求め、走る“文明の利器”はますます進化し続けていくことでしょう。

鉄道のない我が県は、自動車との生活は切っても切り離せず、一家に一台ではなく一人一台も過言ではありません。

通勤や休日の家族サービス、趣味や娯楽においても、常に自動車と行動を共にしています。

小さな島国において、大動脈となる主要道路も数少なく、至る所で交通渋滞が発生し、それを避けようと、無理な追い越しや割り込みをする車が目立ちます。

また、観光立県ということもあり、ピーク時には見渡す限り「わ」「れ」のナンバーが溢れ、走り慣れない土地では、急発進、急ブレーキ、のろのろ走行など、まさに“迷い運転”も目にすることもあります。

自家用車、レンタカー、大型トラック、自動二輪など、日々さまざまな車が行き交う中、“県民の足”と例えられるほど自動車を必要としている私たちにとっては、それはまた、交通事故が発生する確率も高くなることを意味します。

日々の疲れや睡眠不足、カーナビやスマホの操作、脇見運転や信号無視など、事故を誘発する原因は様々です。

そして、何よりも無自覚無責任な行為が『飲酒運転』です。

ある年の人口10万人あたりの飲食店店舗数では、沖縄県が722.52軒と全国1位。飲み屋店舗数でも同じく554.61軒と1位で、全国平均の2.5倍という圧倒的な数を占めています。

平成18年には「飲んだら乗るな、飲むなら乗るな」のスローガンと共に「ハンドルキーパー運動」が推進され、ハンドルキーパーにはソフトドリンク無料や料理が半額といったサービスが飲食店側から提供されるなど、店側も飲酒運転の根絶に協力してきました。にもかかわらず、わが県は、飲酒運転事故率ワーストと、相変わらずの不名誉な順位が続いています。

官民一体となつての飲酒運転撲滅運動や飲酒運転ゼロの声も、ドライバーひとりひとりの意識に届かなければ、何の意味もありません。今後更に、強く主張し訴え続け

ていかなければならないでしょう。

交通事故を減らすには、運転者自身が交通ルールを守り歩行者に対する思いやりや、ゆとりを持った運転を心がけることが大切です。また歩行者も、決められた場所の横断や青信号で渡るなどの基本的なルールに従うことが必須です。何ら難しいことではなく、各々が自覚を持った行動をとるだけで、悲惨な事故は防げるのです。

沖縄県交通遺児育成会は、交通事故に遭い死亡または後遺障害者となった保護者を持つ児童・生徒たちの学業支援と健全育成を目的に、昭和 46 年「沖縄県交通遺児を励ます会」として発足しました。

同 54 年には財団法人沖縄県交通遺児育成会に発展・設立、同時に寄付金の募金活動を開始、翌 55 年から交通遺児への奨学・育成金の給付を開始しました。立ち上げの段階では沖縄県からの出捐金をはじめ多くの企業や団体、個人が、その趣旨に賛同し支援をしていただきました。

当時の沖縄は、「交通戦争」ということばが生まれるほど死亡事故が多発し、大きな社会問題となっていました。それに比例し、交通遺児も増え続けましたが、県民の理解やマスコミ各社の報道協力のおかげで、交通遺児支援の輪を広げることができ、多くの子ども達が学業に専念することができました。

皆さまの浄財を財源にしてスタートした給付型の奨学・育成事業は、年次を重ねる中で給付金の増額や、新たに見舞金、激励金といった給付項目の追加、また、対象者を専門・専修学生にも拡大するなど改善してきました。

支援を受け、社会に羽ばたいた子どもたちは、教育、医療、行政、警察、民間と様々な分野で活躍し、給付支援に対する恩返しを行っています。

交通遺児が生まれることのない平和で安全・安心な社会が理想ですが、交通事故は現実には発生しています。過去には、約 300 人の交通遺児を認定・給付した年もあり、無念さを嫌という程痛感した時期もありました。

この 10 年ほどは年間 180 人～130 人で推移してきた遺児数も、ここ 2～3 年は 100 人前後になるなど、減少傾向も見えています。

—望んで交通遺児になったわけではありません—

ルールを守り正しい運転を心がけていても、交通事故は、いつ、どこで自分の身に降りかかってくるかわかりません。

遺族は言います。「朝、普段通りに出掛けていきました。でも、普段通りに帰ってくることは、もうありません。」「些細なケンカをしたまま別れることになったのが悔やまれます。」「主人は、殺されたようなものです。」

そして残された子ども達は、心に開いた大きな穴を埋められず、学校へ行くことが

できなくなりました。笑うことがなくなりました。悪夢なら覚めて欲しいとただただ願
い…

ついさっきまでの当たり前が、当たり前でなくなった時、平凡な家族が「遺族」とな
ってしまった時、無邪気な子ども達が「交通遺児」となってしまった時、平和な家庭を
壊した責任は、誰に、どこにあるのでしょうか。

一人の身勝手な行動が、誤った判断が、最悪な事態を生み、最悪の結果を残しま
す。

もう止めましょう、覚めることのない悪夢を生むことを。

忘れないでください。

ある日突然、最愛の家族を失ってしまった子どもたちがいることを。

忘れないでください。

逆境の中でもくじけることなく、自分の夢を持ち続け、未来に向かって必死に頑張
っている健気な子どもたちがいることを。

忘れないでください。

交通事故は未然に防げるということ。

—子どもたちに愛の手を—

沖縄県交通遺児育成会は、交通遺児支援のための基金を呼び掛けています。

これまでに多くの団体、企業、個人の皆さまから心温まる寄付金を賜ってきました。

改めまして、事務局一同厚く御礼申し上げます。

小学校入学から専門・大学卒業時まで、沖縄県内の学校に通う子ども達に無償給付
支援を行っている当育成会の趣旨を多くの方々に知ってもらうためにも、今後もホー
ムページや機関紙「南風」等で発信していきます。

少しでも当育成会の活動に目を留められた方々と共に、交通遺児支援ができれば、
とても心強く思います。

どうぞ、多大なるご理解とご協力を賜り、交通遺児のサポーターとして見守ってい
ただけましたら幸いです。

交通遺児の子ども達に温かい愛の手を……。